

ワーキングママの子育てを振り返って

宮井真千子

(企業役員)

私は、一九八三年にお茶の水女子大学家政学部（現生活科学部）を卒業後、松下電器産業株式会社（現パナソニック株式会社）に入社しました。時代は、男女雇用機会均等法施行前。女性は結婚退職がほとんどでしたが、仕事を始めると予想外に仕事が面白く、結婚、出産、育児を経験しながら仕事を続け、最終的にはパナソニック株式会社で初めての女性役員にまでキャリアアップしました。今日はそのキャリアアップをしながらも格闘してきた私の子育てを振り返って思うところを述べてみたいと思います。

私は、結婚後なかなか子室に恵まれず、五

年が過ぎた頃、コウノトリがほほ笑みました。天使のような娘の笑顔を見ながらこの上ない幸せを感じる毎日。母親を頼って必死に生きている娘がいとおしくて、何があってもこの子と生きると自分に誓いました。待望のわが子でしたので、この子を置いて仕事を続けられるのか悩みましたが、八か月で子どもを保育園に預け、私も職場復帰をすることになります。

子どもが一歳を迎えたとき、主人が神戸から横浜に転勤になり、一人で育児をすることになります。とても不安だった私を支えてく

宮井真千子（みやい まちこ）

森永製菓株式会社取締役（執筆当時）。

1983年パナソニック株式会社入社。同社初の女性事業部長、女性役員を歴任。2014年同社役員を退任。

れたのが保育園でした。娘の通っていた保育園は私立の認可保育園でしたが、朝は七時から、夜は延長保育の希望を出せば八時まで預かってくれました。保育園の先生方は、私が八時ぎりぎりのお迎えになっても、「お仕事お疲れ様でした」といつも笑顔で迎えてくれます。嫌な顔をされたことは一度もありません。このように、仕事が忙しいながらも保育園に助けられて、私は卒園まで子育てを楽しみながら過ごすことができました。

娘が保育園の年長のときに、私は大阪に転勤になり、娘の卒園を機に転居することになりました。娘は仲良しの保育園のお友達と別れ、見ず知らずの土地で小学校に入学することになります。

私の子育ての苦労はここから始まりました。

小学校入学の事前説明会で、準備物の多さに驚き、しかも、お母さんの手作りで、とい

うようななんとも言えない雰囲気を感じ、動いているお母さんを前提とした保育園との違いに直面します。PTAの会合はもちろん、授業参観も家庭訪問も平日。すでに管理職になっていた私は、仕事との両立に慌ただしい毎日を送るようになります。クラスの中でもフルタイム勤務のお母さんは少なく、保育園のときのようないママ友ネットワークもなくなり、仕事が忙しかった私はおのずと学校から疎遠になっていきました。

娘も学童保育が始まり、放課後、小学校近くの児童館に通うことになりました。六時までの施設でしたので、それ以降はピアノやお習字の習い事ですなご、必要なときにはベビーシッターさんに来ていただいて、なんとかやり繰りしてきました。社会はまだまだ働くお母さんに優しい現実を痛感する日々でした。

小学校で待ち受けていたもう一つの大きな

出来事が、中学受験でした。

教育熱心な地域でしたので、早い子どもは小学校低学年から塾通いが始まります。クラスのお友達の多くが通っていたこともあり、娘も小学校五年生で塾に通うようになりました。

ちょうどその頃、私はパナソニックで初めての女性事業部長に就任することになります。事業部長という立場は男性でも超多忙。帰宅が深夜になることも多く、頻繁に海外出張もありました。こういう状況ですので娘の中学受験は母親として何もしてあげられなかったのですが、娘の頑張りでなんとか合格を手に入れた、本人が希望する私立女子中学校に入学、憧れの制服に身を包み、新しい生活がスタートしました。

しかしながらこの中学校で、子育ての一番の苦勞が待っていました。

娘は中学三年生のときに、体調を崩し入院を繰り返すことになりました。娘は働いている私に迷惑をかけてはいけないと思い、我慢をしていたのです。ある日、学校から体調不良で呼び出され、「どうしてお母さんに言わなかったの？」と聞くと、「だってお母さん、仕事忙しいから」という、思いも寄らない言葉が返ってきました。娘に要らぬ心配をさせていた自分がなんてダメな母親だったのかと思ひ知らされ、「何があってもお母さんにとって一番大事なのはあなただから」と事あるごとに伝え、それからは母娘の会話が増え、娘は私に学校での出来事などをよく話すようになりました。

娘の病気は投薬治療が続いたものの、幸いに重篤なものにはならず、大学受験にも臨み、この春から本人の希望通り、食にかかわる仕事に就いています。

これまでの子育てを振り返って思うのは、

保育園の頃よりもむしろ小学校以降のほうが苦労は多かったということです。働くお母さんが、手のかかる幼児期を乗り越えて子育てが一段落したと安心してしまいう時期が、実は一番大変な時期ではないかと思うのです。

「スクールカースト」「中二病」等の言葉に象徴されるこの世代特有の閉鎖性、LINEやツイッターなどSNSでの心無い誹謗中傷。豊かな時代といわれますが、子どもたちを取り巻く環境はあまりにも過酷です。私たちが育ってきた環境とはまるで違うのです。私たちの経験が役に立たないのが現代の子育てかもしれません。加えて、働くお母さんに優しい社会ではない現状も負の力を与えてしまっているようにも思います。女性の就労改善の対策として待機児童の問題がクローズアップされますが、働くお母さんにとっては、幼児期以降の子育てにも、時代の変化がもたらす出口の見えない困難さがあるように思います。

最後に、少子化時代の母親の多くは「子育て若葉マーク」です。子どもの成長の段階ごとに何に気を配りどうすればよいのか、経験も知識もなく悩むことが多いのではないのでしょうか。仕事は短期間で客観的な結果が出ますが、子育てはそうはいきません。若葉マークの母親にとって必要なときに必要な支援や情報が得られる社会であってほしいと思いますし、本来楽しい子育てが悲惨なものにならないように、時代の変化を反映した社会システムの構築も必要であると思います。

人生100年時代の到来を迎え、社会は想像以上のスピードで変化しています。幼保一元化も叫ばれて久しいですが、なかなか実現しない現状に鑑み、そんな悠長なことを言っている場合ではないのでは、と思う今日この頃です。